

コモンズ

— 学びの共同体 —

Commons

- 滝川における清らかな水辺の創造計画in上牧町 …P1~2
- CDC座談会~1年間を振り返って~ …P3~4
- 榛原連合自治会研修会、
宇陀市特産品等認定審査委員会 …P5~6
- 高知れいほくプロジェクト …P7~8
- デジタルサイネージ、木製テーブル設置のお知らせ …P9
- 留学生が春日若宮おん祭に参加 …P10
- 県大生とシニアカレッジ受講生が大立山まつりに参加…P11

滝川における清らかな水辺の創造計画

in 上牧町

上牧町で推し進められている『滝川における清らかな水辺の創造計画』。これは上牧町、NPO 法人楽しいまちづくりの会、町民がタッグを組んで、町内を流れる滝川を市民の憩いの場にする計画です。奈良県立大学神吉ゼミがサポーターとして参加しています。

■ ワークショップで市民の声を集めて整備計画案を作成

時系列に振り返りながら、神吉ゼミの活動をまとめました。

①沿川歩き(2014年12月)

香芝市との境界から王寺町との境界まで、滝川沿いを NPO 会員とゼミ生とで一緒に歩きました。鯉、ナマズ、アオサギ等の動物が生息していたり、沿川に田園風景が広がっていたりする等の良さはあるものの、葎が生い茂りゴミが放棄されている等、問題も多く見つけられました。

②NPO 会員参加のワークショップ(2015年3月)

学生による滝川の現状・課題および全国の先進的な親水空間事例の報告の後、ワークショップで滝川全体の整備イメージについてアイデアを出し合いました。

③整備イメージの提案(3月)

現地調査およびワークショップで出された意見をもとに、整備コンセプトを「安全・安心な川づくり」「きれいで心地よい川づくり」「住民が集まる川づくり」「自然とふれあえる川づくり」「健康増進の川づくり」の5つにまとめました。

④市民参加のワークショップ(5月)

昨年度は川沿い全体の整備イメージについて検討を重ねましたが、今年度は川沿いにある町有地の具体的な整備計画について検討。48人が参加した市民ワークショップでは、町有地見学後、整備イメージについて具体的なアイデアを出し合いました。

⑤町有地の整備計画案の検討(6～7月)

NPO が実施した市民アンケート調査、学生による現地調査、ワークショップで出された意見などを踏まえて、町有地の整備目標を「皆が集い憩える場所にしよう」「子どもたちが水と触れ合える場所にしよう」「緑に癒されたい」「生物と触れ合いたい」「健康増進を目指そう」「様々なイベントを開催したい」の6つにまとめました。そして、これらの目標を達成するためには、まず川がきれいになることが必要であること、さらにこれらの目標が達成されたならば滝川がまちのシンボルになることを示しました(図1)。

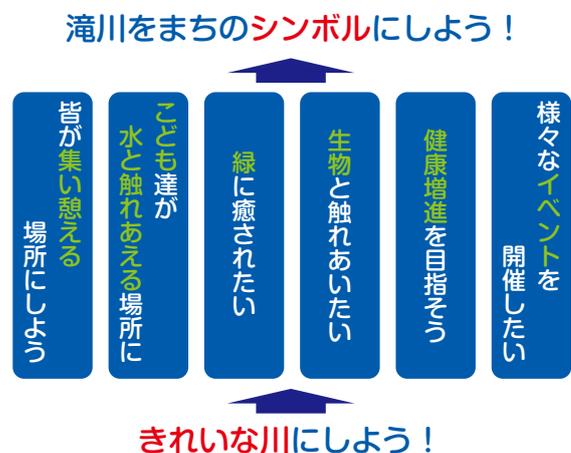


図1 滝川の整備目標

⑥NPO 会員参加のワークショップ(8月)

より具体的にイメージをつかみやすいよう、整備イメージのイラストを作成し、それをたたき台としてアイデア出しをしました。「町の花であるササユリを咲かせたい。」「足湯は欲しい。」「夏の夜にビールを飲めるといいね。」「トイレがないと不便。」「いや、防犯を考えると近くのコンビニのトイレを使わせてもらうのがいいのでは。」等、今まで以上に具体的な意見が飛び交いました。

⑦町有地の整備計画案の提案(9月)

これまで皆さんから出されたアイデアをもとに、町有地の整備計画案を作成しました(図2)。現在、整備計画の具体化に向けて、上牧町において庁内および河川管理者である県との調整が続けられています。

■ 活動を振り返って

今回の活動を振り返って、住民参加のまちづくりのポイントについてまとめてみます。

まず、ワークショップでは「これが欲しい、あれを作ってくれ」ではなく、「これがしたい、あれもやりたい」という皆の想いをまず出し合った上で、そのためには何が必要なのかを考えることが大切です。そして、行政に「これもやって、あれも作って」ではなく、自分達で何ができるのかできないのか、できない部分については誰に協力してもらうのかという発想も大切でしょう。今回の滝川の活動では、NPO を中心とする市民が長い時間をかけて検討してきたわけですから、計画が実現した際には、管理も含めてそのパワーが活かされることを期待しています。

今回の反省点として、ワークショップ参加者が高齢の男性に偏っていたことがあげられます。ワークショップを広く呼びかけても足を運んでくれる人は限られますので、イベントを開催して参加者にアイデアを出してもらう、子育てサークルの集まりにこちらから出向いていく等、子どもを含めた若者や障害者等、より多様な人たちのアイデアを集めるための工夫が求められます。

(コミュニティデザインcommons 准教授 神吉優美)



図2 滝川沿いモデル地区の整備イメージ(基本計画:神吉優美 CG制作:鶴昇平)



2回生
太田英治

相手のこともわからないし、自分の考えも相手に伝わらないし、信頼関係も生まれない。コミュニケーションデザインを学ぶ上では、信頼関係を大事にしていかなければならない。それと言葉をいっぱい知ったことかな。言葉を知ること、論が深まり、考えをたくさん思いつくようになったな。

太田：二人共、この一年で収穫があったんだね。

船曳：うん(笑)

柳田：太田くんは、どうだったの？

太田：僕は、いろんな方向から物事を考えられるようになったことかな。今まではひとつの視点でしか考えてなかったけど、この一年で、複数の視点を持つて柔軟に考えることが当たり前になってきたかな。

柳田：自分の考えを曲げるほどの視点はいらぬ。もし人と同じ視点であれば、ものを言わない。人と違って、それが心から思っていることであればはっきりと言う。

太田：それ大事だと思う。柳田：自分の考えを曲げるほどの視点はいらぬ。もし人と同じ視点であれば、ものを言わない。人と違って、それが心から思っていることであればはっきりと言う。

柳田：モットーかあ…、僕は人と違う視点を持つことかな。

太田：確かにね。

柳田：自分ができないという前提を受け入れるのは、何というか、一番伸びしろのある人間だと思うよ。

太田：いい感じに言ってくれるね(笑)



Q. どんなモットーで

この一年間過ごしてきましたか？

太田：僕のモットーは、「謙虚になれ！」かな。

船曳：謙虚？

太田：変に自信持ったらダメだ。変に自信持ったらあとと自分を苦しめることになるからね。自信は強く持たないほうがいい。でも「自分が未熟であるから、私は精進する」っていう心を持つていけば、必ずいい結果になると思うんだ。

柳田：自分ができないという前提を受け入れるのは、何というか、一番伸びしろのある人間だと思うよ。

太田：いい感じに言ってくれるね(笑)

Q. 最後に、

来年のコモンズ生に向けて一言！

太田：下手なプライドを捨て、謙虚になることです。

船曳：求められているものが何かを的確に捉えることができたなら、コモンズの活動はより面白いものになります。なので、求められているものが何かを的確に捉えられるように頑張ってください。

柳田：ずっと頑張り続けるのはしんどいと思うので、頑張るべきポイントを考えてください。



2回生
柳田 僚



後期の活動



コモンズルームリノベーション



秋華祭



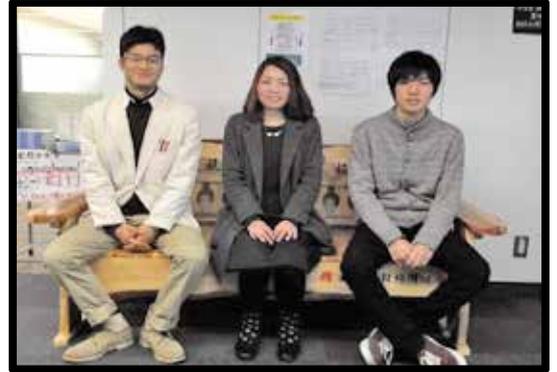
CDC茶話会

コミュニティデザインコモンズは、地域創造の中でも、人や人のつながりから地域を作ることに重点を置いたコモンズです。主にコミュニティ政策や、持続可能なコミュニティ、共生・協働のまちづくりなどの分野の研究を進めています。コモンズゼミの時間では、グループワークやフィールドワーク、ヒアリング調査、コンペティションなどを行い、ライブラリワークとフィールドワークの両立を目指しています。ゼミの活動以外にも学生が主体となって、様々な活動を展開しています。

Community Design Commons

CDC 座談会

～ 1年間を振り返って～



Q. 1年間のコモンズの活動を振り返ってどうでしたか？

柳田：すごく新鮮な一年間でした。右も左もわからない状態ですね。

太田：コモンズ制度は我々の代からの制度なので、先生自身も模索中で、そんな中で私たちは、良く言えば先駆者、悪く言えば、未来の県大生のためのモルモットとして1年間活動してきましたね。

柳田：船曳さんは、どうでしたか？

船曳：楽しかったかなと思います（笑）。実際にゼミとしてやってる感じで。座学だけっていう感じがなかったのが良かったのかなあと・・・



2年生 船曳加穂理

太田：コモンズの活動を振り返ると、自分の無力さを実感し、劣等感にさいなまれた一年間でした。

柳田：でも気づけたから、良かったんじゃない？

太田：気づけて良かったし、それを改善していくためにこれから頑張っていくかと思っています。

船曳：いいと思います！

太田：二人は、一年で何か変わったことかある？

船曳：変わったこと……この一年で自分のスキルがよくなった面もあれば、もっと改善していかないといけない面もたくさん出てきたかな。

柳田：個人的には、すごく変わったと思う。一つ目は、いろんな人とたくさん喋るようになったことかな。やっぱり喋らないと、

前期の活動



コンペティション



コモンズ合宿

榛原連合自治会研修会

地域経済コモنزの学生が「地域が抱える課題について」発表

平成 27 年 12 月 12 日（土）、宇陀市役所 4 階大会議室において、平成 27 年度榛原連合自治会研修会が開催されました。



竹内幹郎宇陀市長のご挨拶

同会において、伊藤忠通学長の引率のもと宇陀市役所を訪れた地域経済コモنزの学生 11 名が、榛原地域の自治会長の方々、来賓として参席された竹内幹郎宇陀市長に対し、「地域が抱える課題について」というテーマでプレゼンテーションをし、ディスカッションを行いました。



伊藤忠通学長のご挨拶

「地域づくりについて若者はどのように思っているのか」「どのような魅力があれば宇陀市に来てもらえるか」、実際に若者の代表として学生の声を聞いて、それを地域活性に役立てていきたいという榛原連合自治会からの投げかけに対して、本学の地域経済コモنزの学生たちが応えるというかたちで、実現したのが今年度の研修会です。



学生による発表の様子

プレゼンテーションは、3 本立ての内容で、県大生 11 名は各々分担して、榛原各地区の分析、調査、研究に取り組みました。まず 1 つ目には「人口データによる現状分析」と題し、榛原の人口推移を各地区、性別、年代層に分けてデータの分析と考察結果を示しました。2 つ目には「現地調査による現状分析」として、平成 27 年 11 月 21 日（土）にバスで現地に赴き、行った現地調査で得られた各地区の課題及び特性を発表しました。この現地調査は、榛原地域の各地区長と宇陀市職員の方にご同行ご協力いただき、実現したものです。そして、3 つ目は、「地域が抱える課題の解決策」として、これまでの分析と考察でわかった課題に対する解決策について、学生自身の視点から提言しました。



意見交換会の様子

人口減少と人口流出が原因で起こる少子化高齢化、それに付随して起こる自治体会員の減少、コミュニティの希薄化、空き家の増加、防災と防犯、獣害対策、農地の荒廃等、さまざまな課題に対する取組みとして、日本国内で成功した事例をあげ、なおかつ、その事例を宇陀市にどう当てはめていけばよいかを学生なりに考察した結果を発表しました。

休憩を挟んで行われた各地区自治会長の方々とのディスカッション（意見交換会）では、学生たちのプレゼンテーションに

対して、自治会長の方々より数多くのご質問と貴重なご意見をいただきました。中には、「宇陀市について様々な方面から分析をしてみて、実際に現時点での宇陀市に住んでみたいと思いますか」といったダイレクトな質問もありましたが、一人一人、率直に自分の思いや意見を述べることができました。

学生にとっては、地域の中に入って行って、地域のことを分析し、地域の方々の生の声を聞くことは大変なことだったかもしれません。しかし、同時に、地域でのこのような取組みは、なかなか得ることのできない「学びの場」でもあります。これからもこういった機会を得ることで、学生たちが、社会に出て行くに当たって必要な経験と知識を身につけていくことが期待されます。

宇陀市特産品等認定審査委員会において 県大生が委員として参加をしました

平成 27 年 12 月 3 日（木）14 時 30 分から、宇陀市役所内にて行われた「宇陀市特産品等認定審査委員会」に県大生 3 名（伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん）が委員として参加をしました。

この委員会は、宇陀市の農林水産物を活用した新商品の開発に対して補助をする「宇陀市特産品等開発補助事業」と、宇陀市内業者が行う販路拡大事業に対し、経費の一部を補助する「うだチャレンジアシスト補助事業」の二つの補助事業において、申請のあった案件に対して、それぞれふさわしいかどうかを審査及び認定する委員会です。

まず、各件の申請者のプレゼンテーションが行われます。それを見た各委員は、その新商品や事業に対して質問をし、委員会のメンバーが各案件に対して評点をつけます。最終的に、その評点の合計点に応じて、認定するか否かが決定されます。県大生も、感じたところ、疑問に思ったところなどを積極的に質問し、宇陀市の地域にふさわしい内容であるかどうかを審査しました。

この日は「宇陀市特産品等開発補助事業」が 3 件、「うだチャレンジアシスト補助事業」が 3 件の計 6 件の申請案件に対して審査を行いました。近年、学生の意見や提言を聞いて参考にしたいという各地域からの要望が増えています。同委員会への参加は、宇陀市の地域産業の活性化に対する取り組みの一端を知ることのできる格好の機会であり、学生にとって学ぶところも多いのではないかと思います。



宇陀市特産品等認定審査委員会の様子



右から伊島萌乃さん、稲垣昭則さん、仲健一さん

高知れいほくプロジェクト

■ 嶺北地域とは？

嶺北(れいほく)地域は高知県の長岡郡大豊町、長岡郡本山町、土佐郡土佐町、土佐郡大川村の4町村からなり、地図で見ると四国のちょうど真ん中に位置しています。高知市の市街地から高速道路でおよそ30~40分の距離にありながら、美しい川と豊かな緑が残された地域です。農業、林業などが盛んで、中でも美しい棚田から取れる様々な農作物が美味しいと評判です。推定樹齢3000年の「杉の大杉」は日本一の大杉として名高く、「早明浦(さめうら)ダム」は四国地方最大のダムで「四国のいのち」とも呼ばれています。その他にも様々な見どころがある嶺北は、日本有数の雨景地域でもあり、森林率全国一にふさわしい自然豊かな地域です。住んでいる人もみな温かく、みな生き生きと生活しています。移住先としても人気のある嶺北地域は、日本各地から年間30組以上が移住してくるといわれ、移住者の定着率も高く、多くの方がこの嶺北地域での暮らしに満足しているそうです。



杉の大杉(大豊町)



早明浦ダム(土佐町・大川村)

■ 高知れいほくプロジェクト

「高知れいほくプロジェクト」は、日本の中山間地域の一つである高知県嶺北地域で活動しています。現在は3年生4名で活動しており、少人数ながらも役割分担をし、連携をとりながら企画・運営を行っています。2013年6月に嶺北地域観光・交流推進協議会と奈良県立大学が結んだ「連携協力に関する包括協定」に基づき、調査や交流などの活動を行ってきました。主な活動としては、県大生が、毎年数回に渡り高知県嶺北地域を訪問し、観光や行政の課題を様々な体験を通じて学ぶと共に研究・交流を行っています。



棚田のある風景

■ 2015 年度の活動

2015 年度は、嶺北地域にある「集落活動センター」の調査を通して中山間地域と学生を繋ぐプログラムを企画しました。9月27日(日)から4日間の日程で行われ、2年生12名が参加しました。「集落活動センター」は、集落機能の維持と自立を目指す高知県独自の取り組みで、現在県内に17か所、嶺北地域には2か所に設置されています。現地では、自治体職員やセンターの関係者、地域住民への聞き込みなどが行われました。成果報告会では調査の報告を行い、訪れた地域住民との意見交換も行いました。報告会の様子は後日、高知新聞に掲載されました。



地域住民への聞き込み調査

■ 活動を通じて

高知れいほくプロジェクトのコンセプトの一つに「学生と中山間地域をつなぐ」ことを掲げています。これには「大学生の今、嶺北の雰囲気味わってほしい」という思いが込められています。私は2年間の嶺北地域での活動を通じて、都会と全く異なる環境に身を置き、多くの人と出会い、様々な経験をさせていただきました。生まれも育ちも都会の私にとって、プロジェクトに参加しなければ中山間地域に足を運ぶことはなかったのかもしれませんが。多くの学生が家と大学とバイト先との行き来を繰り返し、そして就職し都会に住むとなると、嶺北のような中山間地域を訪れることはほとんどなくなってしまいます。今後は、引き続き地域で学ばせていただきながら、学生が中山間地域を訪れるきっかけを作っていきたいと思います。

(高知れいほくプロジェクト 企画長 コミュニティデザインcommons 秋元優介)



参加者による記念撮影



地域住民との交流

奈良信用金庫さまより

デジタルサイネージをご寄贈いただきました

平成 23 年に本学と連携協定を締結している奈良信用金庫さまより、デジタルサイネージ(65 型)をご寄贈いただき、平成 27 年 12 月 17 日(木)に地域交流棟にて寄贈セレモニーを執り行いました。

ご寄贈いただいたデジタルサイネージは地域交流棟 1 階玄関ロビーに設置しております。本学は、そのデジタルサイネージの特性を活かして、フィールドワークや学生の活動紹介などの様々な情報のより迅速な発信に努めてまいりますので、学生の皆さんも、新しい情報の収集手段としてご活用ください。



奈良信用金庫 大歳清次 理事長(右)と
伊藤忠通学長(左)



農林中央金庫大阪支店さまより

木製テーブルをご寄贈いただきました

農林中央金庫大阪支店さまより、テーブル(長テーブル 5 台、丸テーブル 2 台)をご寄贈いただき、平成 27 年 12 月 15 日(火)、地域交流棟にて贈呈式を行いました。

テーブルは、奈良県森林組合連合会が製作された「奈良の木」を使用した木製のテーブルで、農林中央金庫大阪支店は、社会貢献事業の一環として、県内公共施設等へ木製テーブルを寄贈されています。

いただいた木製テーブルは地域交流棟の 1 階ロビーと 2 階の国際交流サロンに配置しております。大切に使用して、県大の憩いのスペースとして有効活用しましょう。



農林中央金庫大阪支店 戸高聖樹 支店長(右)と
伊藤忠通学長(左)



春日若宮おん祭大宿所祭のお渡り式時代行列に 本学の留学生が参加しました

平成 27 年 12 月 15 日(火)に執り行われました春日若宮おん祭大宿所祭のお渡り式時代行列に、本学の留学生、韓天芸さん、陳怡さん、程皓さん、林廉凱さんの 4 名が学生ボランティアとして参加をしました。韓さんと陳さんは中国の上海師範大学からの、程さんと林さんは台湾の開南大学から来た留学生です。

古都奈良の師走を飾る伝統行事として有名な春日若宮おん祭は、春日大社の摂社である若宮神社の祭礼で、毎年 12 月 15 ～ 18 日に繰り広げられます。一般的には 17 日のお渡り式やお旅所祭が良く知られていますが、15 日は大宿所詣とって、おん祭を差配した大和国内の有力な士たちが、精進禊齋をして祭礼の前日に大宿所に参集し、お籠りをすることからこのように呼ばれ、この日にも時代行列が行われています。

この日、留学生 4 名は、春日大社の白衣に着替えて、午後 1 時に JR 奈良駅を出発。三条通、東向商店街、奈良女子大学周辺、小西通、餅飯殿センター街を歩いて到着地である大宿所まで、太鼓を鳴らし、紙垂傘と呼ばれる祭事物を持つなど、それぞれの役割に分かれて、1 時間ほど練りました。

この後、毎年、時代行列後に振舞われる奈良の郷土料理ののっぺい汁をいただき、最後に、大宿所にて執り行われる御湯立ての式を拝見して、活動を終わりました。

当日の天気は雨の予報で、時代行列の開催は危ぶまれていましたが、ちょうど、時代行列の間だけは雨に遭うこともなく、気温も暖かく、お天気に恵まれました。

中国や台湾にも伝統行事がありますが、留学生たちにとっては、それとはまた異なる日本の伝統行事に触れることで、得るものがたくさんあったと思われます。



「第1回大立山まつり」で県大生とシニアカレッジ受講生が山車の曳き手として参加をしました

平成28年1月29日(金)～2月2日(火)にかけて開催された「第1回大立山まつり」。この「大立山まつり」は、奈良を代表する守護神である四天王に因んだ「大立山」に灯りを入れた巨大な4基の山車が、特設ステージの太鼓に合わせて、夜の平城宮跡を練り歩く、勇壮な迫力のあるお祭りとして、今年初めて開催された大規模なイベントです。

開催中の1月31日(日)は、奈良県立大学を代表して、学生会執行委員会を中心とする学生有志8名とシニアカレッジ受講生の有志10名が、一致団結して、幅7m、奥行7m、高さ7.4m、重さ2.5トンもの巨大な山車を曳き回しました。

前日、前々日とお天気が悪く出鼻をくじかれたものの、31日は好天に恵まれ、期間中で最も多くの2万人近い観光客で賑わいました。奈良県立大学のチームは、四天王のうち「増長天」を担当。この「増長天」の山車は特別仕様になっていて、四隅の車輪を浮かせた状態で、中央の2つの車輪のみで水平を保ちながら巡行します。そのため、山車を曳き回す体力と技術が必要とされましたが、当日の昼のリハーサルでコツをつかんだ県大チームは「ソイヤサ！ソイヤサ！」の威勢のいい掛け声とともに、目いっぱい大極殿を駆け巡り、山車を激しくゆすって旋回を繰り返すなどして、大勢の観客を魅了するパフォーマンスを披露することができました。

期間中5万人を超える観光客が訪れた「大立山まつり」は、今後、奈良の冬の新しい祭りとして、定着していくものと思われます。



奈良県立大学が曳き手を担当した増長天の山車